

西欧中世文書の史料論的研究：平成20年度研究成果 年次報告書

岡崎，敦
九州大学大学院人文科学研究院：助教授

山田，雅彦
京都女子大学文学部：教授

徳橋，曜
富山大学人間発達学部：教授

高橋，一樹
国立民族博物館：助教授

他

<https://hdl.handle.net/2324/1932626>

出版情報：2009-03
バージョン：
権利関係：

1. 研究会「文書史料とはなにか ―類型と機能―」

日時： 2008年7月5日（土）14時から

7月6日（日）10時から

場所：九大文学部西洋史学研究室

共通テーマ「文書史料とはなにか ―類型と機能―」

報告：

岡崎 敦「文書史料とはなにか ―序論にかえて―」

「西欧中世の証書 ―問題関心の変容と研究の展望―」

山田雅彦「中世中期西欧都市による文書管理の多様性

―北フランス・低地諸地方を中心に―」

徳橋 曜「中世末期の中部イタリア都市における文書保存の意識と実際」

高橋一樹「日本中世文書の体系とその歴史的性格

―証書系文書と内部資料を中心に―」

文書史料を主たる対象として共同研究を開始するにあたって、「文書史料」についての基本的な諸問題を概観する研究会を開催した。

「文書」という日本語は、一般のみならず、学問の世界でも多義的に用いられており、歴史学においてすら共通の合意は存在しないかに見える。歴史現象としては大変類似することが多いかに見える、日本と西欧の中世史においても、「文書」の定義に関しては、研究の観点自体の相違もあって（日本の史料学界におけるメタレヴェル思考の欠如ではないと思える）、奇妙なズレが生じていること自体、あまり認識されていない。しかしながら、文書館制度を有する西欧においても、文書史料類型に属するとみなされうる資料が、従来すべて同じように取り扱われてきたわけではない。また、この資料類型が、具体的に何を包含しうるのかについては、歴史学研究の深まりとともに、認識の変容が見られ、このこと自体、史料の存在・機能・伝来の意味を問う史料論研究の進展を反映しているともいえる。

この研究会では、文書史料のもっとも常識的な二大類型を念頭におきながらも（証書系資料と行政内部資料）、異なる地域と時代を組み合わせる諸報告を準備した。具体的には、全体の序論に続いて、まず、アルプスの北の地域を主たる研究対象とする研究者による、「証書」と「行政内部資料」に関する報告を置き、これに対比させるかたちで、中世末期イタリア都市に関する報告を設定した。岡崎報告は、文書形式学研究の研究史を再検討す

ることで、研究の現在と今後の展望を論じる。山田報告は、中世盛期から末期の北フランス・低地方の都市を対象に、実務系資料の生成から、その後世での機能や管理までを、統一的な視点で見晴らす貴重な貢献である。徳橋報告は、西欧でもとりわけ資料伝来が豊富な、中世末期のイタリア都市における文書の管理と伝来状況を体系的に概観することを通して、都市の文書行政のあり方を照射する。最後に、重厚な伝統を誇る日本中世古文書学の専門家であり、同時に、「アーカイヴズの比較史」研究プロジェクト等の比較研究の経験が長い高橋一樹氏に特にお願いして、日本中世文書を概観いただき、西欧の文書史料の性格を比較の観点から再検討した。

以下は、各報告者が、当日の報告をもとに、新たに書き下ろしたものである。なかには、論文に近い形式に、全面的に準備し直されたものも含まれている。これらに加えて、最後に、「文書史料とはなにか」を考えることの意味を問うコメントが置かれる。